

□ : 山口県で陽性が確認されたもの

3 ウシの調査結果

検査対象		感染症名	検査方法	実施年度	陽性/ 検査件数	検出率 %
ウシ※	口腔	腸管出血性大腸菌感染症	細菌培養	H18～21	24/200	12.0%
			ベロ毒素 遺伝子検出		42/150	28.0%
	体表		細菌培養	H18	0/ 50	0.0%

※ 生後1か月程度の子牛

動物の各カテゴリーと動物由来感染症との関連

動物を生活環境により分類した場合、それぞれのカテゴリー（群）と動物由来感染症の関連性が見いだせます。

カテゴリー（群）	動物由来感染症との関連
ペット（伴侶動物）	イヌやネコもヒトにうつる病原体を持っている。不適切な触れ合い等によりまれに感染する。その他、鳥やウサギ、爬虫類などどのようなペットもヒトにうつる病原体を持っている可能性がある。
野生動物	どのような病原体を持っているか不明なことが多い。 ヒトにとって重篤な感染症の病原体を持っていることもある。
家畜	畜産物が食中毒や感染症の原因となる場合がある。 衛生対策の徹底で予防可能な感染症が多い。
展示動物	ヒトにうつる病原体を持つので、ヒトと動物が触れ合える施設では、動物由来感染症に配慮した対策が重要である。

動物由来感染症の病原体

動物由来感染症の原因となる病原体には、大きいものでは数センチ（時には数メートル）もある寄生虫から電子顕微鏡を用いなければ見ることでできないウイルスまで、様々な病原体があります。また、従来の微生物の概念とは異なるプリオンという異常タンパク質も動物由来感染症の原因となることが分かっています。

病原体	引き起こされる感染症の例
ウイルス	狂犬病、日本脳炎、ウエストナイル熱、デング熱、チクングニア熱、ジカウイルス感染症、ダニ媒介脳炎、E型肝炎、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）、中東呼吸器症候群（MERS）、重症急性呼吸器症候群（SARS）、エボラ出血熱、Bウイルス病
リケッチア・クラミジア	日本紅斑熱、つづが虫病、オウム病
細菌	Q熱、ペスト、サルモネラ症、レプトスピラ症、パスツレラ症、猫ひっかき病、ブルセラ症、カプトサイトファーガ感染症、コリネバクテリウム・ウルセランス感染症、カンピロバクター症、炭疽、ライム病、鼠咬症、野兎病
真菌	皮膚糸状菌症、クリプトコックス症
寄生虫	トキソプラズマ症、回虫症、エキノコックス症、クリプトスポリジウム症、アニサキス症
プリオン	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)

注意を要する感染症（ウシ）



唾液、糞便を介した感染

腸管出血性大腸菌感染症

〈症状〉

- ・腹痛、下痢、嘔吐などの食中毒症状
- ・重症化すると、激しい腹痛と血便を主症状とする出血性大腸炎を呈する
- ・まれに溶血性貧血※、血小板減少及び急性腎不全を3主徴とする溶血性尿毒症症候群（HUS）を併発し、死亡することもある

※ 溶血性貧血：赤血球が破壊されることによっておこる貧血

- 多くのウシから腸管出血性大腸菌が検出されています。
- 動物とふれあった後は、必ず手洗いなどをしましょう。

予防方法

- 動物の糞便を適切に処理する。
- 動物との過剰なふれあいを避ける。
- 動物と接触した際は、手洗いを励行する。

